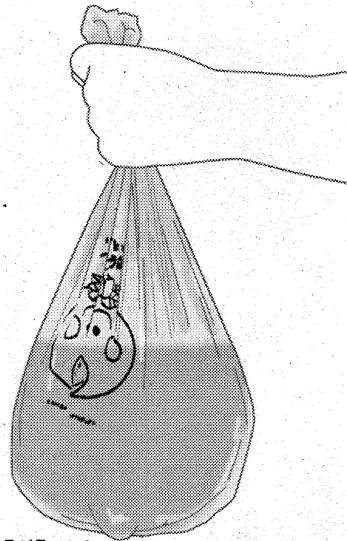


北村 森の

このポリ袋
地味だけど世界初



illust:Yokota Shigi

6月10日に、Amazonで一般販売をスタート。
トップページで「公電テクノ」と検索すると、この商品が見つかる。
販売価格12枚入り1980円（税込み）。問い合わせ先 <http://www.koudentechno.jp/>

商品のイノベーション（新機軸）をもたらすのは、研究資金や人材にあふれる大企業だけではないのかも、という話をします。

1枚のポリ袋のことなんですけれどね。

その名は「べんり袋」といい、見た目はポケットティッシュに折りたたまれた状態です。大きさもそうだし、軽さもそう。だからカバンやポケットに難なく放り込んでおける。必要になったら、外袋の切れ目（この切れ目も、ポケットティッシュと同じような感じで備わっています）に手をつまめば、中からポリ袋の本体が現れます。

ただのポリ袋？ それが違う。丸い平底になっていて、渦巻きのようにねじれているんです。普通のポリ袋と異なり、角がない。

さほど大きくないのですが、90^g以上の重さに耐えうるし、底部に角のないデザインであることが幸いして、まず破れません。

それがどうした、と思われる人がいるかもしれないので、もう少し説明しますね。

このポリ袋、水なら2^{リットル}は薬々入ります。水を汲んでから運ぶ際にも底面が裂けません。使い道はまだあります。煙を避けながら空気を確認できるし、必要な場面では汚物の処理にも役立つ。つまりは、被災時に威力を発揮する「漏れないポリ袋」というわけです。

聞けばこれ、世界で初めての仕様だそう。開発したのは、公電テクノという、埼玉県

川口市にある電気設備工事の会社です。先代社長の奥さんが、8年をかけて完成にこぎつけた。奥さんのご両親は関東大震災を経験していて、奥さんは幼い頃から防災教育を受けていました。その教えをずっと忘れず、このポリ袋の開発に生かそうとしたらしい。本業とは別に、こつこつと研究を続けた。

底面がひねってある形状は、鳴門の渦潮がヒントとなって思い立ったそうです。ただしその発想を商品に落とし込むのに難儀した。なにせ、どこにもない仕様だったので……。最後は、1500万円かけて、専用の生産機械をゼロから作り上げたといいます。

完成後は、クチコミで少しずつですが反応があり、鉄道会社や損保会社などのノベルティグッズに採用されています。さらに、親子向けのイベントで配布する機会にも恵まれた。子供たちにこそ普段から携えてほしい、という思いから、人気アニメ「はなかつぱ」とのタイアップを取り付け、袋にキャラクターを印刷したタイプも生産し始めています。

ここまでの3年間で5万袋が出たと聞きました。地味だけど価値ある数字だと思います。で、6月10日、アマゾンで一般販売を始めたそう。12袋入りで1980円ですから、1袋あたりの計算では165円になります。小さな会社の小さな商品ではありますが、その存在意義は大きいんじゃないかなあ。

きたむら・もり 月刊誌『日経トレンディ』編集長を経て独立。近著は『仕事ができる人は店での「所作」も美しい』（朝日新聞出版）